

仏教に基づく道德教育と人間形成

第五回：ジャータカを資料とする道德授業

同朋大学
岩瀬真寿美

- 「兎ジャータカ」を資料とする道徳教育について考えることができる。
- 「黒牛ジャータカ」を資料とする道徳教育について考えることができる。

ジャータカの概要と特性

- ジャータカ (jātaka)
 - ・「昔生まれていたこと」を意味するサンスクリット (梵語)
 - ・ジャータカを訳す場合は、「前生物語」や「本生譚」などが一般的
- 仏教の開祖である釈迦の前世の物語
- 釈迦は現世での修行だけでなくそれ以前から多数の生涯において修行していた
- もとは中北インド附近に存した教訓的な一般説話
- 仏教の中に取り入れられ、**釈迦の前世と結びつけた**
- パーリ語聖典に547話が現存

ジャータカの概要と特性

- イソップ物語やアラビアンナイトなど世界各地の文学に影響を与た
- 日本では『今昔物語集』や『沙石集』など
- 発達段階に応じた道德資料となる可能性を持つ物語群
- イソップ物語を教材化する研究
 - ・ 小川哲哉「古典寓話の「翻案」教材化に関する一考察——イソップ寓話の分析を中心に——」
 - ・ 道德的標語を情報として知らせるのではなく、自己探求活動を土台として道德的価値内容を真に理解させるために内容表現を工夫する教育実践を提案
 - ・ 古典的説話をいかに現代の道德教育に活かしていくかを考察するにあたって大変参考になる方法

※日本道德教育方法学会編『道德教育方法研究』第18号、2012年

ジャータカの概要と特性

- 読み物資料を紹介

- 原文ではなく、世間に刊行されている書物において通俗的に要点を紹介
- 小学生に理解しやすいように講師が改編したもの
- 下線太字の箇所は、特に発問に関わる箇所

ジャータカ316 「ウサギジャータカ」

田辺聖子『NHK宗教の時間 仏教物語ジャータカをよむ（下）』
（NHK出版、2005年、119 - 122頁）を適宜改編

読み物資料「兎ジャータカ」

昔、ウサギと猿とジャッカルと獺（かわうそ）が森に住んでいた。森は川と山と村に囲まれていた。かれらは、ウポーサタ（きちんとした生活ができているかの反省）を行いながら生活していた。ウポーサタの日にはかれらも時間がくるまで食事をせずにすごし、だれか食べ物を欲しいひとが来たら自分の食べ物を与えるのであった。

あるウポーサタの日に、獺は朝早くでかけて、漁師が捕ってガンジス河の岸に串刺しにしてかくしておいた七尾の赤い魚を持ってきて、食べてもよい時が来たら食べようと言って寝た。ジャッカルも畑の番人の小屋で肉の串とトカゲとヨーグルトをみつけ、持ってきて彼も時が来たら食べようとその晩は寝た。猿もマンゴーの実を採ってきてすみかのなかにおいておいた。



ところが、ウサギは、

「時がきたら**ダツバ草**をたべよう。もしもだれかおなかがすいて困っているひとがきたら、私の体の肉をあげましょう。」と思って寝た。このウサギの思いを知った**帝釈天**(インドの神さま)は、ウサギを試そうと、**バラモン**の姿になって、まず獺のすみかにやってきて言った。

「何か食べ物をいただけませんか。」

「七尾の赤い魚をさしあげましょう。それを食べて森に泊まってください。」

バラモンは、それを受け取らず、「そのままにしておいてください」と言ってジャッカルのところに行った。ジャッカルは、肉の串とトカゲとヨーグルトを差し出した。それから猿もマンゴーの実を差し出した。

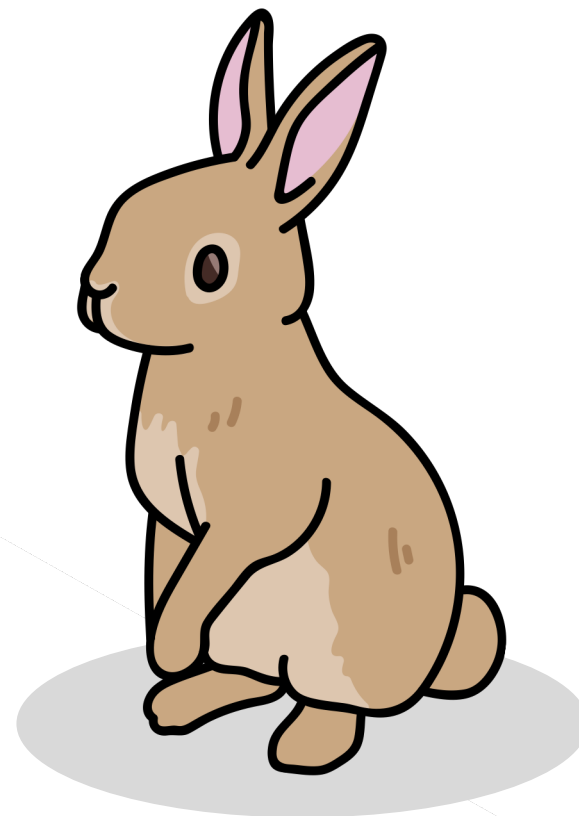


ところがウサギはバラモンに言った。

「わたしは今まで自分がしたこともないような
布施をいたします。あなたは薪を集めて火を起こして
わたしに知らせてください。わたしはその火の中に
とびこみます。わたしが焼けたら食べてください。」

と言って、歌を歌った。

ウサギには、ごまもなく、豆也没有せん。
お米すらないのです。
この火で焼かれたわたしを
食べて森に泊まってください。

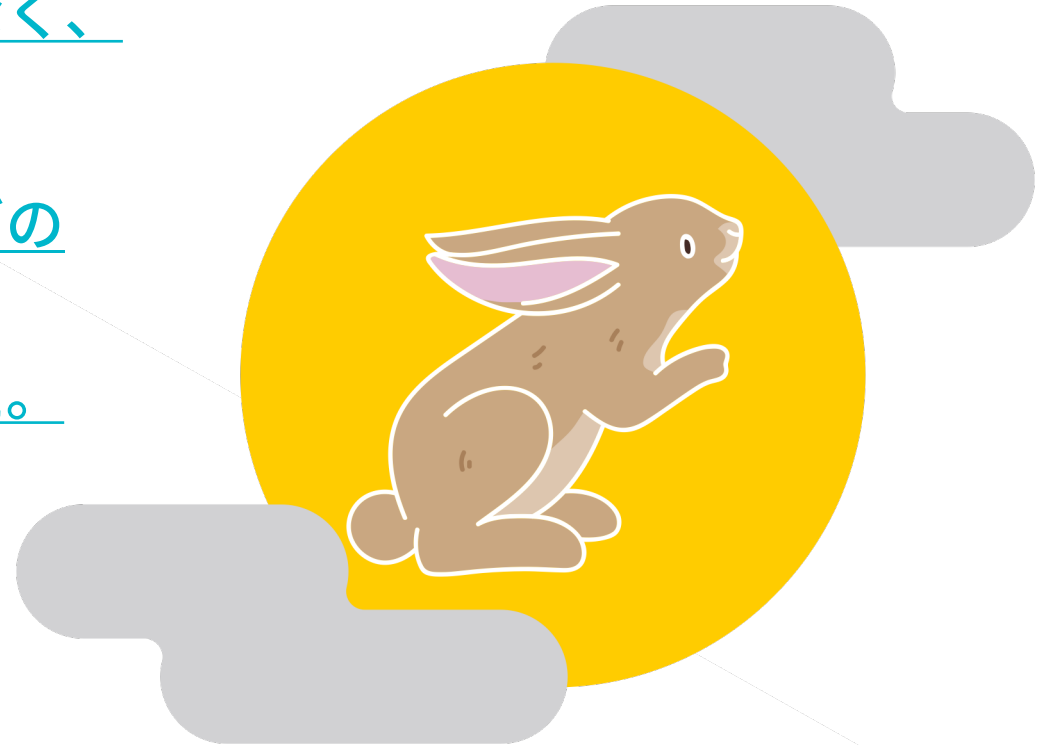


読み物資料「兎ジャータカ」

こう言ってウサギは「もしわたしの毛の中に生き物がいたら、死ぬことがないように」と三回体をゆさぶって全身が火の中に入るようにと飛び上がって火の中に身を投げ入れた。

ところが火はウサギの毛を一つとして焼くことなく、まるで雪の中にいるようであった。

その時、バラモンは帝釈天の姿に戻り、「ウサギの優れた行いが永遠に知られるように」と月にウサギの絵を描いた。それから天界に帰って行った。



- **ジャッカル**：犬科の一種。
- **ウポーサタ**：訳して布薩。「諸々の不善や煩惱（ぼんのう）を断じて、清浄（しょうじょう）な修行をするための懺悔（ざんげ）式をいう。毎月十五日、月末に行う。」（増谷文雄ほか著『仏教日常辞典』太陽出版、1994年より）ここでは、「きちんとした生活ができているかの反省」と括弧書きで加筆した。
- **ダッバ草**：草の一種。
- **帝釈天**：「仏法（ぶつぽう）に帰依（きえ）する人々を守り、阿修羅（あしゅら）の軍を征服する」（同辞典より）ここでは「インドの神さま」と加筆した。
- **バラモン**：「インドの四姓（ししょう）の最高位にある種族。僧侶の階級で、神と等しい力を持つという」（同辞典より）ここでは「僧」と加筆した。
- **布施**：「他者に説法や財物などを施すことによって修行すること」（同辞典より）

学習指導案 「施し」を主題とする道徳授業——「兎ジャータカ」を資料として

小学校 第 学年 組道徳指導案

1 日時、場所 平成 年 月 日 () 年 組 教室

2 主題 施し

3 ねらい

ウサギ、猿、ジャッカル、^{かわうそ} 獺 がそれぞれバラモンに食べものを施すことになるが、食べものが見つからなかったウサギは自身の身を捧げるために火の中に身を投じた。しかし体はちっとも熱くない。月にウサギの似姿があるという伝承の元となったとも知られる寓話である。他者のためを思っておこなう行為は、その行為が苦しいものであっても苦しく思えないという考え方について深く考えさせたい。

5 本時の展開 （「○」は発問。◎は中心発問。「・」は予想される児童の回答）

段階	教師の説明・発問および予想される児童の回答	留意点
導入	○「本時は、月にウサギの絵が描かれているという話のもととなったインドに伝わった話を読んでいます。」	日本の昔からの伝承（ここでは月のウサギの絵）の中に代々受け継がれてきた生きる上での大事なこと（ここでは「兎ジャータカ」における教訓的考え方）が表されてきていることを知らせる。

展開 前段

教師が読む資料（A）を目で追いながら物語を理解する。

○「この物語の作者は、ウサギが体を揺さぶってから火に入ったと描いている。ここで作者はわたしたちにどんなことを考えて欲しいと思っているのでしょうか？」

- ・自分の体に付いている虫も自分と一緒に死なせてはいけないという優しい気持ちの大切さ

- ・どんなに自分にとって厳しい状況のときでも、他の人のことを思いやることの大切さ

ここでのウサギが他の生き物に対する思いやりをもっていることを作者が描きかけたことに気づかせる。

○「この物語の作者は、火に入っても熱くなかったとウサギに言わせている。ここで作者はわたしたちにどんなことを考えて欲しいと思っているのでしょうか？」

- ・ 自分から苦しむことはつらくないということ
- ・ 自分の苦しみよりバラモンへの思いやりの方がウサギにとって重要だったということ

人のためを思っ取る行動は、それが自分にとって苦しいことであつたとしても、その苦しさが少なくなるということを作者が描きたかつたことに気づかせる。

○「この物語の作者は、バラモンが月にウサギの絵を描いたとしている。ここで作者はわたしたちにどんなことを考えて欲しいと思っているのでしょうか？」

- ・人のために生きた人の生き方は後の世になっても人々の心に残っていくということ

- ・自分の都合を考えて行動しなくても、誰かが見ている評価してくれるということ

自分で自分を守らなくても、世の中の誰かが見てくれるということを作者が描きたかったことに気づかせる。

展開 後段

◎「一見、苦しいはずのおこないが、自分のためではなく、だれか他の人のためを思っておこなうと苦しさは少なくなる」ということが生活の中にあると思いますが、どんなことでしょうか？」

・「勉強」も「将来の夢」を思い浮かべると苦しさが減る。

・「苦手な食べ物を食べる」ことも「作ってくれた母親」を思うと苦しさが減る。

苦しいことを苦しいと思いながらおこなうより、他の人のためになるとか、将来のためになるとか考えておこなった方が、苦しくないという、兎ジャータカの論理を明確に説明する。

ワークシートに記入することによって静かに内省させる。

終末

「施しには三つの種類があると仏教では言われています。それは財施、無畏施、法施です。物質を恵むのが財施であり、これは目に見えるものです。次の無畏施は「^{おそ}畏れが^ふ無い^せ布施」ということで、他の人の不安などを取り除いてあげることです。最後の法施は、仏教の教えを広めるということ、これはお坊さんを中心に考えたお布施ですね。皆さんに関係があるのは物質の施しと、不安を取り除いてあげるという施しだと思います。いつも相手のことを思いやることで、自分自身の苦しさは少なくなるというメッセージを届けてくれるお話を本時は学びました。」

施しには色々な種類があることを補足する。

施しに目を向けることにより、自分の苦しみが少なくなるという、昔から人々に受け継がれてきた知恵について説明する。

ジャータカ29 「黒牛物語」

田辺聖子『NHK宗教の時間 仏教物語ジャータカをよむ（下）』
（NHK出版、2005年、52 - 54頁）を適宜改編

読み物資料「黒牛ジャータカ」

昔、バーラナシー（インドの地名）でブラフマダッタ王が国を治めていた時のこと、あるおばあさんの家に泊まった商人たちが宿泊料の代わりに幼い子牛をおばあさんに与えた。おばあさんは、子牛を乳粥（がゆ）などで育て、わが子のように可愛がったので、人々から「ばあちゃんの黒子牛（くろこうし）」とあだ名で呼ばれるようになった。大きくなると真っ黒になり、村の牛たちと一緒に歩き回った。村の子供たちもこのばあちゃんの黒牛になつき、角や首にぶらさがったり、尻尾につかまって遊んだ。

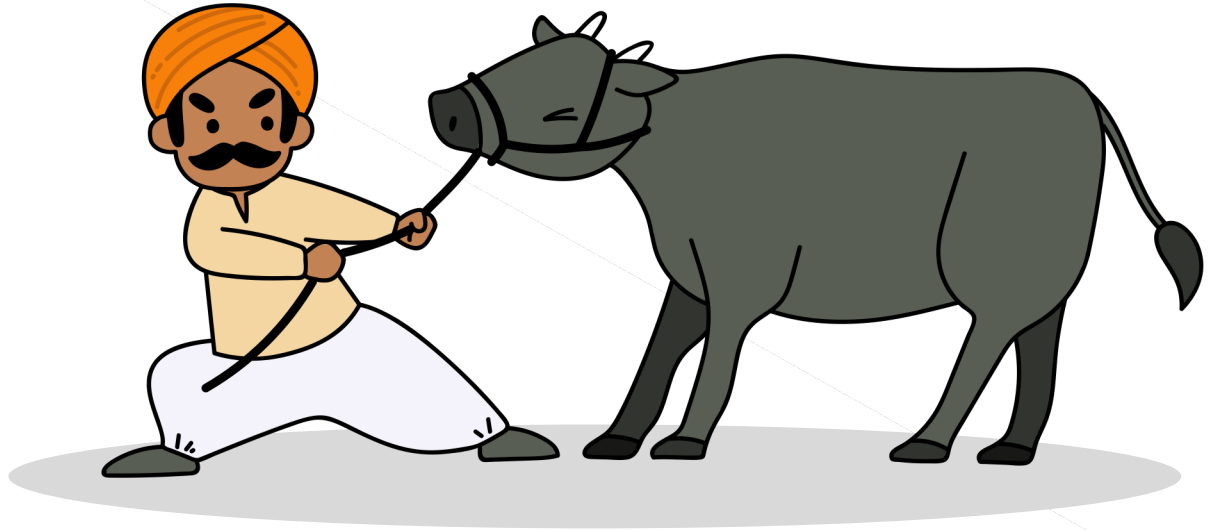
そうするうちにばあちゃんの黒牛は、ばあちゃんのことを、
「ばあちゃんは生活が苦しいのに我が子のようにわたしを育ててくれた。何とかして助けてやりたい。」と思うようになった。



読み物資料「黒牛ジャータカ」

ある日、商人の息子が五百台の荷車を牛にひかせて、でこぼこの渡し場（渡し場）にやってきた。ところが彼の牛はどの牛も一台の荷車をも渡すことができなかった。そこで商人の息子は、渡し場の近くを歩いていた黒牛を見てこの牛に荷車を引かせたいと思った。黒牛の鼻を綱で縛って荷車を引かせようとしたが、黒牛は動こうとしなかった。

黒牛は、心の中でお金をかせいでばあちゃんを楽にさせてやりたいと思っていたので、
「賃金をもらえる約束ができれば荷物を引こう」
と動かなかった。すると、商人の息子が、
何となく察知して
「一台荷車を渡したら、二金（にきん）
あげよう。五百台全部渡したら千金払う
ことにしよう。」
と言ったので黒牛は動いた。



読み物資料「黒牛ジャータカ」

そして一気に一台の荷車を向こうの陸地に渡した。それから五百台全部を渡した。そこで商人の息子は、賃金の入った包みを黒牛の首に結びつけた。しかしその中には五百金しか入っていなかったもので黒牛は、「約束が違う。この人を先にはいかせないぞ。」と、先頭の荷車の前で道をふさいだ。人々が何とかして黒牛をどかそうとしてもびくともしなかった。

商人の息子は、「きっと賃金が不足していることを知っているのだ」と、包みの中に五百金足して、また首にかけてやった。すると彼は千金を首にさげてはあちゃんのいる所に帰った。子供たちが首にかけているのは何だろう、と寄ってきたが、それをふりほどいて、一目散にはあちゃんの元にやってきた。とにかく五百台もの荷車を向こう岸に渡したのだから疲れ果てて目が赤くなっていた。

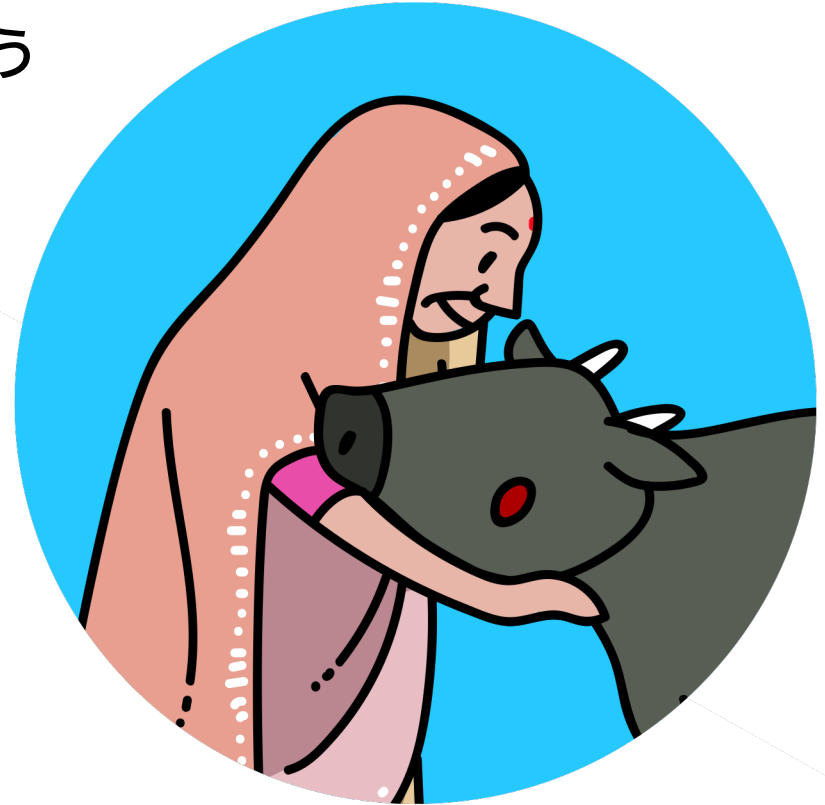


ばあちゃんは首にかけた包みの中に千金を見つけて言った。

「お前これはどこで手にいれたの。」

牛飼いたちの話で自分のために働いて手に入れたのだと知ると、

「おやまあ、わたしがお前が働いたお金で生活しようなどと思っていると思っているのかい。こんなに疲れてしまっで。」と言って、
ばあちゃんは、黒牛に栄養のあるものを食べさせた。



学習指導案 「思いやり」を主題とする道徳授業——「黒牛ジャータカ」を資料として

小学校 第 学年 組道徳指導案

1日時、場所 平成 年 月 日 () 年 組 教室

2主題 思いやり

3ねらい

黒牛が自分を可愛がって育ててくれたおばあさんに楽をさせたいという一心で一生懸命に働き、一方おばあさんはその黒牛の思いに慈愛をもって応えるという両者の思いやりの話である。無償の愛という意味での慈悲の心が、昔から日本で大切なものとして受け継がれてきたことを確認させ、自身の生き方を振り返るきっかけとさせたい。

4 資料等

適宜、「黒牛とおばあさん」の画像

5 本時の展開 （「○」は発問。◎は中心発問。「・」は予想される児童の回答）

段階	教師の説明・発問および予想される児童の回答	留意点
導入	ジャータカとは何かの概要説明 「ジャータカはインドの昔のお話で、それが世界の様々なお話（アラビアンナイト、イソップ童話、『今昔物語集』など）に影響を与えた。今にも伝わっているということは、それだけいつの時代にも重要な生き方の知恵が描かれているからだろう。」	いつの時代にも重要と考えられる生き方があることを、ジャータカの普遍性をもとに説明する。

展開 前段

- ・教師が読む読み物資料（A）を眼で追いながら物語を理解する。

○「この物語の作者は、黒牛が子供たちを振りほどいて一目散に老婆のところへ走って行ったと描いている。ここで作者はわたしたちにどんなことを考えて欲しいと思っているのでしょうか？」

- ・おばあさんにお金を渡す前に子供たちにとられてはいけないと黒牛が切実に思っていたこと。

必ずお金をおばあさんに渡したいという強い思いを作者が描きたかったことに気づかせる。

○「この物語の作者は、黒牛が疲れ果てて目が赤くなっていたと描いている。ここで作者はわたしたちにどんなことを考えて欲しいと思っているのでしょうか？」

・おばあさんを楽にさせたいという強い願いを黒牛が抱いていたこと

おばあさんを楽にさせたいという黒牛の強い願いを作者が描きたかったことに気づかせる。

○「この物語の作者は、おばあさんが、自分のためにお金なんか要らないのにと黒牛に話したと描いている。ここで作者はわたしたちにどんなことを考えて欲しいと思っているのでしょうか？」

- ・おばあさんが黒牛の面倒を見てきたことは見返りを求めてのものではないということ

- ・おばあさんは黒牛を自分よりも大事に思っているということ

見返りを求めないおばあさんの黒牛に対する思いやりの気持ちを作者が描きたかったことに気づかせる。

展開 後段

◎「自分がこれまでに受け取ってきた思いやりを思い出して書いてみましょう。どんな人からどのような思いやりを受けてきましたか。」

- ・遅く帰って来た時、親からの心配
- ・元気がないとき、友達からの一言

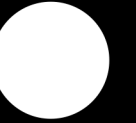
見返りのない思いやりの連鎖があることを説明する。
ワークシートに記入することによって静かに内省させる。

終末

「仏教で慈悲という言葉が使われることが多くあります。それは憎しみなど嫌な感情には変わらない無償の愛を指します。このような気持ちを持つと、慈悲を受けた相手もまたこのような気持ちになり、というように、思いやりは連鎖していくことができます。」

慈悲という言葉の意味を補足する。

終わり



※この教材は、平成24年度上廣倫理財団研究助成を受けた成果の一部です。